

# 近世初期の大名改易と「御家」相続

— 高橋元種を事例に —

Daimyo Improvement and Family Inheritance in Early Modern Period

大賀 郁夫

キーワード

罪人隠匿 改易 連座 御前公事 城請取り

## 目次

はじめに

一 富田・坂崎出入り一件

(一) 事件の発端

(二) 直盛と信高の出入り

(三) 信高室による左門扶助

(四) 御前対決

二 高橋元種の改易

(一) 猪熊事件との関連

(二) 水間勘兵衛事件との関連

三 改易後の動向

(一) 縣城請取りの経緯

(二) 元種子息のその後

むすびにかえて

慶長十八年、日向国縣（延岡）城主高橋元種が、罪人隠匿の罪により改易された。これは伊予国宇和島城主富田信高に連座したものであると言われる。事件の発端は、石見国津和野城主坂崎出羽守の家人水間勘兵衛が罪を犯し、富田を頼り立ち退き、その返還を求めて出入りになり、出羽守が両御前（家康・秀忠）に訴えたことにある。これにより坂崎家内の私的な事件が公になり、勘兵衛は天下の罪人となったのである。

富田と坂崎間の出入り、それに連座して改易になったとする高橋については諸説あり、不確かな部分も少なくないため、これらの諸説を整理し、諸史料で確認しながらその真相解明を試みた。

富田と坂崎の出入りに関しては、水間勘兵衛の返還を求める坂崎と、勘兵衛を自領内に隠しきれず肥後熊本城主加藤清正を頼り、さらに隣領であることから加藤にその隠匿を依頼された高橋が、最終的に罪人隠匿の罪科により改易になったというのが真相に近いようである。

また高橋改易後の経緯として、縣城の請取りや元種子息たちの仕官など、近世初期の大名改易の実態について明らかにした。

## はじめに

江戸幕府による対大名政策のひとつに大名改易（除封・取り潰しとも）がある。改易とは、十分以上のものの籍を除いて、その知行・家屋敷を没収することである。大名の改易は幕府の大名統制策のなかでは最も厳しいものであった<sup>①</sup>。改易は転封策とともに、初期大名統制の基本をなすものであり、改易原因については軍事的原因、族制的原因、法律的原因の三類型が立てられ、数多くの研究蓄積がある。幕府は口実を設けて大名を取潰し、そのことにより統一政権の威を示したとする見解がある一方で、大名改易は幕府側の政略的・一方的な処断ではなく、幕府の処置の公正性・正当性についての信頼を確保しようとする政治手法とみなす見解もある<sup>④</sup>。

従来は政治史的観点からの検討が中心であったが、近年は改易となった大名家のその後の動向や再興後までを見通し、改易前後の大名家を連続的に捉え、大名家を「家」の連続という視点から捉え直すという試みが行われるようになってきた<sup>⑤</sup>。

関ヶ原合戦の戦後処理が一段落する慶長七年十月以降の改易について、その内容でもっとも多いのが①藩主の不行跡・狼藉・発狂、②連座、③御家騒動等によるものである<sup>⑥</sup>。本稿で取り上げるのは、慶長十八年十月に御前公事が行われ、改易となった富田信高および高橋元種である。罪人隠匿がその主な理由とされるが、ほかにも諸説ありいまだ不明確な部分も少なくない。そこで本稿では、富田・高橋両氏の改易前後の経緯や原因などについて諸説を整理するとともに、記事内容を史料（編纂史料が中心であるが）で確認すること

にしたい。

## 一 富田・坂崎出入り一件

慶長十八年十月八日、江戸城において家康・秀忠両御前で、伊予国宇和島城主富田信高と石見国津和野城主坂崎直盛の対決があった。その結果坂崎の言い分が通り、富田は改易処分となった。この一件については、濃淡はあれ数多くの諸々史料に記載されている。しかし、例えば『駿府記』<sup>⑦</sup>に、

十月八日、今日、富田信濃守<sup>（信高）</sup>□□、坂崎出羽守<sup>（直盛）</sup>□□訴申故、両御所出御南殿、直裁許令聴御、富田非之由被仰出云々、

廿四日、富田信濃守<sup>（信高）</sup>□□、知行被没収、其身奥州岩城島井左京亮<sup>（忠政）</sup>□□被召預、又高橋右近被召預立花左近<sup>（元種）</sup>□□、高橋者、富田依為一味也云々、

とあるように、事件があったことのみを記載するものも多く、具体的な内容がわかるのは限られている。

ここでは、この御前公事に至る事件の原因やその経緯について、『富田宗清覚書』<sup>⑧</sup>を中心に検討してみたい。

## (二) 事件の発端

事件は、坂崎出羽守（直盛）の甥左門が犯罪を犯し富田のもとへ走り、その返還を求めて対立したことから始まる。

史料①『富田宗清覚書』

坂崎出羽守召遣候坂崎左門ト申者、出羽所を立のき、出羽父宇喜多安信所へ参申候を、安信方より信濃ニ左門を預ケ申候、但安信ハ信濃しうとにて御座候、出羽守妹儀ハ、我等ともにハ繼母にて御坐候事、

右之左門、信濃守所ニ罷有候由出羽守承、返候様ニと信濃方へ度々申候得共、しうと安信より預り申たるもの、儀ニ候得ハ返シ申候事難成旨、度々断申候得共、出羽守同心無之付、安信と談合仕、信濃知行所を払申候を、いまた罷有と存、是非返シ候様ニと申候処ニ、右之仕合故、左門行方モ不存候ニ付、其分にて指置申候へハ（後略）

坂崎直盛が召遣う左門が立ち退き、直盛の父宇喜多安信のもとへ走り、安信方から娘婿の富田信高方に預けられたとするが、左門が立ち退いた理由は記されていない。直盛は度々左門の返還を求めるが、舅から預かった者だとして信高は返還には応じなかった。直盛は納得しないので、信高は安信と図って左門を信高の所領から離した。しかし直盛はまだ信高所領に居ると思い、是非とも返すよう迫るが、信高にも左門の行方は分からなかった。

左門が直盛のもとを出奔した理由については諸説ある。

史料②『古老夜話下』<sup>⑨</sup>

坂崎左門は、出羽守か甥にて、出羽に掛り居たり、在京の節、町屋に宿借り居る、其宿の表は、能馬場にて、大方毎朝、出羽馬を責駆す、或日早天に、出羽守馬を責る。左門か旅宿門脇塀の屋根上に、馬の古杓一つあり、左門も不知、傍輩と座敷にて物語居る、出羽彼古杓を見付、此宿ハ左門か旅宿也、かやうの

むさき物を、塀の屋根に掛置、我等馬乗目の前也とて、馬乗寄、鞭にて、彼古杓をかけ取て、塀の内に投入、自然と左門か友人と咄居たる左門か顔にあたり、左門大に怒り、則出羽守か馬乗通ル処を見澄し、塀の上より、主人出羽か面へ、かの古杓を打付る、旅宿の裏口より、馬に打乗り、姉智富田信濃方へ立除、出羽守、則使を信濃方へ遣し、左門を御出し候へとせめ立る、信濃夫婦ハ、左門を隠し、此方へは不来と偽り、勢州の居城へ、密に遣ハす、是より大成騒動となり（後略）

左門が在京していた時、町屋に宿を借りていたが、宿の表は馬場で毎朝出羽は馬を駆っていた。ある日の早朝、出羽が馬を走らせた時左門の旅宿門脇塀の屋根上に馬の古杓が掛けてあったが、左門はこれを知らなかった。左門が傍輩と座敷で話をしていると、出羽がその古杓を見付け、この宿は左門の宿でこのような「むさき物」を塀の屋根に掛け置いて、乗馬の目障りだと鞭でその古杓をはたき落とし、塀の内に投げ入れた。それが左門の顔に当たったため左門は激怒し、塀の上から出羽の顔へその古杓を打ち付け、旅宿の裏口から馬に乗り姉智富田信濃方へ立ち退いた。出羽はすぐに使者を信濃方へ遣わして左門を引き渡すよう要求したが、信濃夫婦は左門を隠し、ここへは来なかったと偽り勢州の居城へ密かに遣わしたとする。

史料③『隈江家記』<sup>⑩</sup>

十一月、高橋右近御改易、此起リハ水摩左門ト云牢人者御覚悟之由達上聞也、此左門最前ハ浮田左京殿ニ介保セラレ居ル、何様之意根在之候哉、左京殿家老ヲ切殺、隣ノ富田信濃殿ニカケコミ申候、左京殿自身信濃守殿門門迄御出在テ、只今カケコミ

申候左門、早々御出可在之由被仰候へハ、信濃守殿家老罷出、イヤ此方ニハ不参由申候ヲ、左京殿拔打ニ信濃殿家老ヲ切殺被申候、夫ニ付両家喧嘩及候ヲ、（後略）

ここでは、左京（坂崎直盛）の家老を切殺した（理由は不明）左門が富田に駆け込んだところ、左京自ら富田邸門まで出向き左門の引渡を要求した。しかし富田の家老が左門は来なかったと答えたところ、左京は抜き打ちに家老を切殺し、両家が「喧嘩」になりそうになった、という内容である。左門が逃げ込んだことを否定した信高の家老を、抜き打ちで切り殺すなど、直盛自身が罪悪人である。

史料④『鉄醬塵蓋抄』<sup>1)</sup>

出羽守、対馬守たりし時、家中に美童あり、男色に愛、呼出ス、美童因者有て辞退ス、坂崎怒て、因者を為討、美童津和野を立退、富田か家中に忍ふ

坂崎直盛に、男色を巡る横恋慕で相手を殺された美童（左門）が富田家中に隠れたとする。

また「当代記」<sup>12)</sup>には次のような記事がある。

左京（坂崎対馬守）小性を成敗しけるに、彼小性の智音の者為散鬱憤、小性を伐ける侍を剪害しけると也、

左京（坂崎直盛）が成敗した小姓と「智音之者」すなわち坂崎左門が、その鬱憤を晴らすため小姓を殺した侍を殺害したとする。これも当時としては無い話ではない。

いずれにしても、直盛と対立した左門が信高のもとに駆け入ったことから、執拗な左門引渡し要求する直盛と、それを拒む信高との対立という構図になっている。

## （二）直盛と信高の出入り

直盛と信高の出入りについても諸説ある。まずは『富田宗清覚書』からみてみよう。

台徳院様將軍宣下之御年〇慶長十年、信濃ハ伏見にて両上様へ當座の御暇申上、在所伊勢ノ津へ休息ニ罷越候処ニ、其時出羽守申候ハ、未左門を、信濃かくし置候ト存、伏見より津へ、出羽守参候処ニ、同日ニ、信濃ハ伊賀越ヲ伏見へ罷登り申候、出羽守ハ本道ヲ参候故、道行違申候、其刻信濃家来篠路左兵衛ト申者出合、則左兵衛所へおちつき候て、出羽守申候者、彼左門定而爰元ニ居可申候間、返シ候様ニと申候所ニ、左兵衛申候ハ、右より信濃守色々申候得共、御同心無之ニ付、爰元を払申候故、只今何方ニ罷有候モ不存候由申候へハ、是迄参候儀、伏見ニテ其かくれも有間敷クソロ、其とをりにて帰候儀いかゝ候間、さあらハ其方を召つれ可罷帰旨申候、左兵衛申候ハ、他人之儀ニ候ハ、左様にも被仰間敷候、又我等も同心申儀にては無之候得共、貴様ト信濃守ハ、兄弟同意之儀ニ候まゝ、我等参申候而、埒明申儀ニ候ハ、何様ニモ心得申候とて、翌日出羽守ト、伏見へ罷上り候、其段、信濃守ハ、伏見にて承候間、急左兵衛を可返由申候得共、出羽守同心不仕候付、此上ハ出羽守と打はたすへき覚悟ニ候ヲ、加藤肥後守、浅野紀伊守など被聞、何かと候所ニ、両上様御耳ニ立、出羽守りふじんの仕合ト被思召候、理非之儀ハ、重而可被仰付候間、信濃に坎にん仕候様にとの為御上使、大久保相模守、榊原式部大輔、本多佐渡守、山岡道阿弥を以、被仰下候、則左兵衛モ返シ申候、其後又榊原式部大

輔、為上使被仰下候ハ、今度之一儀、伏見ニテ理非可被仰付候得共、御代始之儀候間、江戸へ罷下候へ、あなたにて理非可被仰付候旨上意ニ付、還御之御跡より罷下、御當地ニ、四年相詰罷有候処（後略）<sup>13)</sup>

台徳院（秀忠）の將軍宣下があつた慶長十年、信高は伏見で両上様（家康・秀忠）に暇乞いして、在所伊勢国津へ帰国する。直盛は未だに信高が左門を隠匿していると思い、伏見より津へ直盛が行ったところ、同日に信高は伊賀越えて伏見へ上り、直盛が本道を行つたので行き違いであつた。その時信高の家来篠路左兵衛が応対し、直盛は左門が信高所領に居るはずであるから返すよう迫つた。左兵衛は、左門は信高の異見に同意せず、信高のもとを出奔して今はどこにいてもわからないと答えた。すると直盛は左兵衛を人質にとり伏見へ上るが、今度は信高が左兵衛の返還を直盛に要求する。しかし直盛は拒否したので、この上は直盛を討ち果たすべしと信高は覚悟する。こうして直盛と信高は一触即発の事態に陥り、加藤清正や浅野幸長が説得する事態となつた。

このことが両上様の耳に入り、「出羽守りふじんに仕合」を信高に堪忍するようにと、上使として派遣して説得し、左兵衛は信高に返された。その後榊原を派遣して、この度の一件は秀忠の代始めのことであるので江戸へ下り、そこで決着をつけるようにとの上意があつた。信高は江戸へ下り四年江戸に詰めた。

『寛政重修諸家譜』<sup>14)</sup>には次のようにある。

これよりさき姻族坂崎对馬守直盛が甥坂崎左門某罪を犯せる事あるにより、直盛彼を罪せんとす。左門遁出て信高かもとに隠

る。直盛速に馳きたり、探り求といへとも、これを得ず。このとき信高伏見にありしかば、直盛その人質として家臣を捕へ、伏見に参り、信高国制を背ける罪人を隠しをけるむねを東照宮に訴へたてまつるのところ、天下の政務は將軍家<sup>（秀忠）</sup>に譲らせらるゝのあひだ、彼御裁断を仰ぐべしと仰下さる。

直盛が信高の家臣を人質にとり、伏見に赴いて東照宮（家康）に信高が「国制を背ける罪人」を隠匿していることを訴えたことで、事件が公になったことが分かる。

左門をめぐる信高と直盛の経緯を詳細に記すが、内容的には『富田宗清覚書』などと同様である。

### （三）信高室による左門扶助

信高の室が左門を扶助したということが、『富田宗清覚書』では次のように述べられている。

右之左門、出入より肥後へ参居申候処、肥後守死去之後、肥後を出、上方へ罷上候砌、板島より十里餘口ニみつくと申す舟付御坐候、折節、それに普請申付、奉行ニ山本惣右衛門、渡邊九右衛門ト申者、兩人罷有候所ニ、左門、肥州より上リニみつくとへ舟をよせ、右兩人へ申候ハ、永々ノ浪人故、手前何とも罷不成候間、信濃女共ハ我等伯母之事ニ候まゝ、少心付を仕くれ候様にと兩人を頼申候、兩人申候ハ、其方儀、先年、大キ成出入有之、以後行方をも、信濃不存居申候ニ、左様之使申儀罷成間敷ト、達而申候へハ、手前曾テ不罷成、大坂迄上リ候儀モ罷成間敷間、是非頼候由申候故、渡邊九右衛門、板島へ参、信

濃女共ニ申聞候、おいの儀ニ候へハ不便ニ存、米百石程とらせ申候、左門、それより、大坂へ参居申候内ニ、左門母方のおちに新兵衛ト申者、左門召遣候、不届儀にて追出申候処ニ、御當地へ罷下、坂崎出羽守へ、すぐに参、みつくへにて、信濃女共、米とらせ候儀、出羽守ニ申候へハ、出羽守よろこひ、新兵衛ニほうひ仕<sup>15</sup>

左門は出入り後に肥後の加藤家を頼るが、清正の死後肥後を出て上方に上る途中、板島から十里余の「みつくへ（三机）」という船着場を通りかかると。ちょうど運河開削中であり奉行として山本惣右衛門・渡邊九右衛門が来ていた。左門は三机に船を寄せ、奉行兩人に信濃（信高）室は自分の伯母であるので、資金扶助をしてくれるよう口添えを頼んだ。兩人とも最初は断るが、どうしてもと言われ渡邊が信濃室に事の次第を進言した。甥の左門が難儀しているのを聞いて不便に思い、信高室は左門に米百石を与えた。左門が大坂へ上っているうち、「不届」があり追い出されていた母方の叔父新兵衛が、信高室が左門に米を与えたことを直盛に知らせた。直盛は喜び新兵衛に褒美をとらせ、老中に目安を差し出した。証拠となる書付の存在は記されていない。

『寛政重修諸家譜』は次の通りである。

これによりて左門在所あらはるゝにより、潜に去て高橋左近大夫元種がもとに住す。信高が室は左門が姑なれば、其艱難をあらはれみ、ひそかに書を贈りて米三百石をあたふ。時に左門直盛がもとを去しときめし具したる従者、俄に志を変じて其書を奪ひ、直盛に與ふ。直盛大によるこび、ふかく其書を匿し、十八

年（秀忠）にいたりて関東にまいり、これを台徳院殿に訴へたてまつる。<sup>16</sup>

ここでは、左門が高橋のもとに下り、左門の伯母である信高室が左門を憐れみ、書を送り米三百石を与えたとする。またその書を奪い直盛に与えた者を、「直盛がもとを去しとき具したる従者」としている。

『慶長年録』<sup>17</sup>では、「信濃、彼者他所に隠し置、金銀を遣し、令扶助所、令露顕候間」とあり、具体的な金額やその主体が信高室だとは明記していない。

また『当代記』では、次のようにいう。

（十月）八日、富田信濃守ト、坂崎対馬ト、於御前及対決、信濃及難儀ト云々、是ハ坂崎親類ノ侍ヲ、信濃守、依為縁者、抱置シヲ、坂崎達而存分有間、扶持放、然共、他所ニ隠居所へ、内々音信ヲ遣、扶持シケル事ヲ、言上付如此、

富田信濃守、于時伊与国住、十一万石取、改易也、是ハ妹智坂崎対馬以目安、何角令言上、當月八日ニ、於江戸遂対決、手前引有テ如此、則其身ヲ被預森伊勢守○本書、坂崎直盛ヲ信高ノ妹智トナシ、又信高ノ預ケラレタル処ヲ、森伊勢守トナスハ誤ナラン、<sup>18</sup>

十月八日に信高と直盛が御前において対決し、信高が窮地に陥ったのが、「坂崎親類ノ侍」を信高が匿い、「音信ヲ遣、扶持シケル事」を、直盛の妹婿である信高を目安を以て言上したからだという。

また『家忠日記増補』<sup>19</sup>では、

富田ガ妻ハ、左門ガ伯母タルニ依テ、彼ノ妻是ヲ憐ミ、富田ニ知ラセズ、密ニ陰書ヲ左門ガ方ニ遣シ、米三百石ヲ以テ左門ニ



送ル、京都ノ町人内通、是ヲ左門ニ渡ス、然ル処ニ、左門ト同意、逐電スル對馬守カ家人、志ヲ變、對馬守ガ許ニ帰参シ、彼ノ陰書ヲ持来、對馬守ニ與フ、對馬守大キニ悦テ、此陰書ヲ深ク密、匿シ置ク、年ヲ経テ後、對馬守此事ヲ遂ニ果サズ、江戸ニ下テ、台徳院殿ニ訟、

伯母である富田の室が左門を憐れみ、信高に秘して左門に陰書を遣わし米三〇〇石を送ったとする。しかし左門とともに逐電した對馬守家人が変節し、陰書を直盛の元へ届けたとする。

『古老夜話』<sup>(20)</sup>によれば、

信濃内室は、無双の美女、其性質凶悍も亦無双なり、左門ハ甥なれば、上意にても、見放候事不相成とて、則板崎へ呼、中々念頃に介抱す、夫の信濃は、上意堅く候得共、内室の容質美麗なるに、数十年なしミ、夫婦の愛情深く、内方の言をハ、何事にても、其通りに致し背かざる故、

とあり、信高室が無双の美女で性質凶悍もまた無双といい、甥なれば見放すことはできないと、板崎（宇和島）に呼んで介抱したとする。信高は夫婦の愛情深く室の言うままであったとする。

『御当家記年録』<sup>(21)</sup>には次のようにある。

富田妻以為左門叔母故遣印書於大坂、与米三百石於左門、京町人為之謀、而信濃守不知之、初從左門奔者盜彼印書、以畀出羽守之許、出羽守取其書而藏之

信高室が左門に印書を遣わし、米三〇〇石を扶助したとしている。信高はこのことを知らず、当初左門に従っていた者がこの書を盗み、直盛の許へ持参したとする。

このように、信高室が左門の伯母であることから、彼女が左門に米を送り扶助していたことが共通して書かれている。一方『隈江家記』には左門を扶助したのは信高室ではなく、別の人物であったとしている。

其後肥後守殿御死去、若代ニ成、家老ノ名美賀<sup>(並河)</sup>但馬申様、御親父様御代ニ御頼マレ被成候牢人者一段ハ侍ノ義理ニ候、子々孫々迄御覚悟六ヶ敷者ニ候間、国中早々御出シ可被成由申ニ依テ、御子息肥後殿左ニ思召、肥後ヲ御払被成候、然トモ此間ノ頼合トテ、米三十石・銀三百枚被下、船一艘被仕立、何国ニ成トモ心ニ任セラレ候ヘトテ、肥後ヲ御払被成候ニ、大坂ニ着キ此所ニ居住ス、七郎兵衛小者ヲ成敗仕トテ取逃シ候ヘハ、此者早速奉行所ニ罷出候、始終ヲ申上候ニ付、七郎兵衛御トラヘ、則御成敗被成候。<sup>(22)</sup>

左門を匿っていた肥後加藤家では、清正亡き後家老名美賀（並河）但馬がいうには、清正時代に依頼されて牢人（左門）を匿したのは「侍ノ義理」だといひ、子々孫々まで匿うことは難しいので早々に国から出すよう進言する。子息忠広は納得して左門に合力として米三〇石・銀三〇〇枚を下し、船一艘を仕立て心任せに肥後より出て行かせた。左門は大坂に着きここに住むが、成敗しようとして取り逃がした小者が奉行所へ訴え、左門は捕縛されて成敗されたとしている。ここでは信高室が左門に送ったとされる米は、加藤忠広が与えたことになっており、陰書が存在にも触れられていない。

後述するように、御前公事で対決した際に決め手となったのが、信高室の送った陰書としているものが大半であるので、左門の扶助

は信高室が行ったものだとするのが妥当であろう。

#### （四）御前対決

信高室が左門を扶助した証拠を手に入れた直盛は、機に乗じて幕府へ訴える。御前対決の前後について、まず『富田宗清覚書』からみてみよう。

追付御老中方へ、目安を指上ケ申候、其刻信濃在所ニ罷有候処ニ、御奉書参、驚則駿府迄罷下、相詰申候、権現様、其年之八月、當地へ御下向被為成候御跡より罷下候、二十日計過、西ノ御丸において、両上様御前ニテ、対決被仰付候、出羽守方より、右之新兵衛罷出候、信濃方よりハ、山本惣右衛門、渡邊九右衛門出シ申候、新兵衛申候ハ、左門ニ、ミつくへにて米とらせ候儀、信濃モ能存候テ、とらせ候様ニ申上候、信濃守申上候ハ、米とらせ候儀、私一圓不存、坂崎目安差上ケ申候由、在所にて承、則せんさく仕候へハ、女共方より、米とらせ候由承、迷惑仕候由申上候、其時、右之惣右衛門、九右衛門申上候ハ、只今信濃守申上候通、曾テ信濃者不存候、女共方より、とらせ申候所、少モ偽リニテ無御坐候旨、達而申上候処ニ、権現様御意ニハ、左門ニ米とらせ候事、必定ニ候へハ、出羽守申分、尤ニ被思召候との上意之処ニ、又九右衛門申上候ハ、右より申上候通、信濃守曾テ不存候ハ必定ニテ御坐候ト、再三申上候得共、女共之米くれ候儀、不存儀有間敷との上意ニ候、重而理非之処ロ、可被仰付候間、先罷立候得との儀ニテ、御前罷立候、其後四五日過、為上使神尾五兵衛、倉橋内匠ヲ被下、左門ニ米とらせ候事、

信濃不存儀有間敷ト被思召候、其上先年両上様、左門事落著被仰付候所、重而許容仕候段、不屈思召候間、鳥居左京ニ御預被成候條、岩城へ罷越候へとの上意ニ付、則彼地へ罷越、二十一年巳前ニ信濃病死仕候、<sup>23</sup>

在所にいた信高は奉書を受け、驚いて駿府に行くが、家康が江戸へ下ると信高も下り、西丸で両上様御前で対決する。直盛方からは新兵衛、信高方からは山本・渡邊両奉行が出席した。信高は室が左門に米をやったことは全く知らなかった、直盛が目安を出したことを在所で初めて知ったと主張した。両奉行もまた、信高の言う通り左門に米をやったことは知らず、室が（独断で）したことは偽りで言上した。しかし、家康は室が左門に米をやったこと自体は間違いないので、直盛の申分が妥当であるとした。渡邊は再三信高が知らなかったとだと進言したが、室が米をやったことを知らないはずはないとの上意で、信高の非分となった。

四五日後、上使として神尾五兵衛・倉橋内匠を遣し、改めて左門に米をやったことを信高が知らないはずはないとし、また左門の件は先年落着済みのところ再応問題にするのは不届きだとして、鳥居左京に預けるので岩城へ下るよう上意があり、彼の地へ下った。<sup>24</sup>

ここで注意したいのは、信高室が左門を扶助したことを、信高が知らないとは強く主張していることである。しかし室の陰書が証拠となり、罪人隠匿と扶助があったことは動かし難い事実と認定された。同書では、一旦は信高が舅安信から左門を預かったが、直盛から左門の返還を要求された信高が、安信と相談して左門を知行所から退去させたが、その後は「左門行方モ不存候」としており、左門の居



場所自体を知らなかった可能性もある。しかし、室が扶助したことを知らないはずが無いとの上意のため、信高は改易となったのである。

『寛政重修諸家譜』の記述は次の通りである。

(秀忠)

十八年にいたりて関東にまいり、これを台徳院殿に訴へたてまつる。此とき東照宮も江戸城に渡らせたまひしかば、十月八日両御所大廣間に出御あり。老中御前に候し、やがて信高直盛をめし決せらるゝのところ、争論数返にして其是非を辨ぜず。こゝにをいて直盛彼室が書を出して證とす。もとより信高がしらざるところなりといへども、其室の所為なれば陳するに言葉なく、終に罪に伏し、所領を没収せられ、二十五日鳥居左京亮忠政にめし預られ陸奥国岩城に蟄居す。寛永十年二月二十九日死す。内容としては『富田宗清覚書』と同じである。

『家忠日記増補』では次のように言う。

年ヲ経テ後、対馬守此事ヲ遂ニ果サズメ、江戸ニ下テ、台徳院殿ニ訟、于時大神君モ江戸ニ御在城タリ、是ニ依テ、両君、坂崎及ヒ富田ヲ召テ、其訟ヲ聞セ給フ、老臣等御前ニ列座ス、兩人互ニ諍論数返ニ及デ、其甲乙ヲ決セズ、富田國制ヲ背ク者ヲ拘エ置ザルノ由ヲ強テ陳ズルノ時、坂崎懷中ヨリ、富田ガ妻ノ陰書ヲ取出メ、御前ニ捧ル、富田陰書ノ子細ヲ知ラズト云ヘドモ、妻ノ所為タルニ依テ、其罪逃レ難シテ、遂ニ富田ガ誤トナル、<sup>(26)</sup>

ここでも「富田陰書ノ子細ヲ知ラズ」としている。罪人扶助の証拠として信高室の書を出し、それが決め手となったという点は他の史料と同じである。

料と同じである。

『御当家紀年録』では、「及対論之日而出羽守出彼印書示之、富田雖不知之、其妻之所為也、於是果敗、遂富田被没収伊豫宇和嶋配奥州岩城被預鳥居左京亮忠政」とする。<sup>(27)</sup> ここでも室の書のこととは信高は知らなかったとしているが、それは受け入れられなかった。直盛が左門の返還を求めたが拒否され、両御所が入洛の時にそれを訟えた際に、その訴因を「有背国法者、匿在富田信濃守、富田知而不告云々」としていることに注目したい。直盛にとって左門は「背国法者」だというのである。

もともと坂崎家内の直盛と左門の私的な「出入り」であったが、左門が信高を頼り、匿った信高を直盛が両御所に訴えたことで、左門は「背国法者」すなわち国法に背いた大罪人となり、公の問題となったのである。

罪人隠匿がこの時期に問題視されたのは、慶長十六年四月十二日に発布された「三ヶ条誓詞」の存在がある。これは後水尾天皇の即位した四月十二日に、三ヶ条の条書を上落していた諸大名に示し、誓紙を上げさせたものである。

条々<sup>(28)</sup>

- 一如右大將家以後代々公方之法式可奉仰之、被損益而江戸於被出御目録者、弥堅可守其旨事
- 一或背御法度、或違上意之輩、各国々可停止隱置事
- 一各拘置之諸侍已下、若為叛逆・殺害人之由於有其届者、互可停止相拘事
- 右条々若於相背者、被逐御糺明可被処嚴重之法度者也

富田や高橋が「背国法者」である左門を匿ったのは、まさにこの二三条目に抵触したからである<sup>30)</sup>。

## 二 高橋元種の改易

高橋元種が改易された原因や経緯については、今まで数多くの編纂史料および自治体史で取りあげられているが、所説あって未だ定説となっていないのが現状である。木村礎氏は次のように言う。

高橋氏の除封については若干の説がある。一つは、後陽成天皇の侍従猪熊教利を高橋氏がかくまったという説である。慶長十四年、家康が京都の公家・女官の「乱行」に介入し、彼らを処罰し、これがいわゆる公家法度発布の直接の契機になったことは著名だが、猪熊教利はその「乱行」グループのリーダーと目された人物であって、『徳川実紀』によれば、死刑になった人物である（慶長十四年十月十日の項）。その猪熊教利が死刑にならず逃れてきたというのが、「日州高千穂古今治乱記」の説であるが、これはちょっと信じ難い。もう一つの説は、石見津和野城主坂崎出羽守の甥の水間勘兵衛なる者が、坂崎家中の侍を殺して各地を転々とし、結局高橋領内にかくまわれた。このことが発覚して高橋氏は除封されたというのである（『延陵世鑑』）。『徳川実紀』の記述（慶長十八年十月二十四日）はこれに近い。『実紀』には水間勘兵衛という名は見えず、「坂崎が家に左門といふものあり」となっており、左門が事件を起して、各地を転々としたあげく、高橋氏にかくまわれた、としている。

怒った坂崎出羽守が幕府に訴え、かくまった富田知勝（信高―筆者註）（伊予宇和島、一二万石）と高橋元種は共に除封されたのである。要するに罪人隠匿の罪というところであるが、慶長末年から元和・寛永年間にかけて、諸大名の除封がきわめて多かったことは周知の事実であって、徳川氏は口実を設けて諸大名を取潰し、そのことによって、統一政権の威を示したわけであり、高橋氏はその好餌となったのであった<sup>31)</sup>。

林氏が「ちょっと信じ難い」という説が、喜田貞吉『日向国史』下巻である。

初め、元種善政を布き、庶民其の堵に安んぜしが、既にして政事に倦み、姪蕩度なく、悪聲中外に聞ゆ。曾々慶長十四年京師の公卿猪熊侍従○教利以下の乱行あり。罪を幕府に獲て所刑せらる。猪熊の家人水間勘兵衛○勘兵衛、或は將軍秀忠の女千姫の事に依りて乱を作し、坂崎出羽守の家人とし、或は又、富田信高の家人とす。姑く疑を存す。逃れて日向に来る。元種之を領内南方組の内舞野村に隠匿す。十八年夏、事露はれ、十月廿四日、元種立花宗茂に預けられ、其の領邑を没せらる。元種の子長吉、薩摩に走り、島津氏に臣事し、禄千石を賜ひ、主膳と称して、永く其の統を傳ふと言ふ。元種は後、常陸○或は出羽山形に、或は奥州に作る。に配せらる<sup>32)</sup>。

朝廷内の乱行事件として名高い猪熊教利事件との関連から、猪熊家家人の水間勘兵衛が日向に逃れ来て、これを元種が領内に匿い、十八年にそれが露見して改易になったというのである。日向に来たのは猪熊本人ではなく、猪熊の家人水間勘兵衛だとする点と、領内

南方組舞野村に隠匿したと場所を特定している点が特徴である。県内の諸記録類はこの説を取るものが多い。

ここでまず元種改易と猪熊事件との関連を検証し、富田信高と坂崎直盛との出入り、およびそれに連座したとされる高橋元種に関する諸史料・諸記録を整理・確認し、その妥当性を検討することにする。なお高橋元種に関する史料としては、元種の次男長吉を祖とする鹿児島高橋家に伝わり、現在大東急記念文庫が所蔵する「高橋家伝来武家書状集」と、同じく長吉の子孫である原田茂氏から、昭和四十三（一九六八）年に宮崎県総合博物館に寄贈された「高橋文書」があり、両者とも『宮崎県史 史料編 近世Ⅰ』に所収されている。

## （一）猪熊事件との関連

猪熊事件とは、慶長年間に起きた廷臣猪熊教利らの密通事件である。事件については次のように伝わる。

○十四日京都にて當今（後陽成院）の御いつくしみを蒙る女房廣橋局（廣橋大納言兼勝卿女）唐橋局（中院也足軒通勝卿女）をはじめ五人の女房等。猪熊侍従教利。烏丸左大辨光廣。飛鳥井少将雅賢。難波少将宗勝。大炊御門左中将頼國。花山院少将忠長。徳大寺少将宣久。松木侍従宗澄。牙医兼保備後頼継等に挑まれてしばしば参合し。酒宴乱行に長じけること露顕し。兼保を拷問せられしに。ことごとく白状せしかば。逆鱗大方ならず。この輩男女ともに死刑に処せらるべしとの内旨により。京より板倉伊賀守勝重を駿府に召下して。そのことを議せらる。こゝに及び猪熊侍従教利罪を恐れて逐電す。教利は豊臣太閤のとき

も淫行の聞えあり。今度も又この徒の魁首なり。この人の妻は前田中納言利長卿の女なり。織田長益入道有楽の子左衛門佐長政。教利を導て亡命せしめければ。これも連坐すべしとぞ聞えける。<sup>34)</sup>

慶長十二年、少将猪熊教利が官女と密通し、勅勘を受けて出奔した。ついで同十四年七月、参議烏丸光広以下七人の公家衆が典侍広橋以下の女官五人と遊興にふけり、密通していたことが発覚した。後陽成天皇は激怒し、宮廷の風紀肅正のため彼らを死刑にすべしとの内旨により、京都所司代板倉勝重を駿府に下して前将军徳川家康に伝えさせた。家康はまずこれら公家の首魁と目された猪熊教利の搜索を全国に令したところ、教利は日向国に潜伏していたところを県（延岡）領主高橋元種により捕縛され京へ護送した。慶長十四年十月、教利を死罪に、事件に関わった公卿・女官らを流刑に処した。勅勘之猪熊殿御事、九州日向之國にて高橋右近○元種、日向宮崎城主、召擲被指上候由<sup>35)</sup>

出奔した猪熊教利が、どのような経緯で日向まで下り潜伏していたのかは不明であるが、県北各地に「猪熊の伝説」なるものがいくつか伝えられている。

その一つが東臼杵郡北方町（現延岡市）八峽地区にある洞窟で、地元では「猪熊天神」と呼ばれている。<sup>36)</sup> もう一つは同郡北川町（延岡市）熊田地区の墓地に、「猪熊大明神」とある板碑があるという。墓地の川向いには屋形原と称する小集落があり、同所の山の神と称する神社には、猪熊大納言が使用したという遺品の兵子帯が奉納されたという同村屋形原の神社などがあるという。<sup>37)</sup>

さて、元種改易の理由について、この猪熊教利を領内に隠置したとする説がいくつか出されている。その主なものをいくつか示そう。

史料①「日州延岡旧記ニ無之分拔書」<sup>38)</sup>

一天正十五年、高橋右近太夫元種拝領、同十六年移轉、慶長十五年迄在城、惣て廿四年也、是ハ常陸へ流入し玉ふ科ハ、都方井熊様と申公家衆落人被成、肥後より爰許へ落て南方組内舞野村へ宿在候をからめとる、此科ニ依流入と成られ候

公家落人は「井（猪）熊様」であり、これも南方組舞野村に宿在していたところを捕縛されたとする。

史料②「高千穂古今治乱記」<sup>39)</sup>

高橋元種奥州へ流刑之事 附高橋家落去

我心にまかせ諸人を悩まし、其身盛んなる時は奢するなり、爰に京都猪熊大納言罪有て筑紫へ流されけるを元種是を扶助ある、依之將軍家大に怒り給ひ、右近大夫元種を奥州へ流しける、元種三田井家亡魂を霊神と仰き給へ共遺恨絶へ、其上高橋武威にはこれしゆへ其家繁茂し難く、天道の悪しきをうけ斯成行しか、扨亀山城番を遣わさるしといへ共、高橋家臣等必死と成て城門を開かされハ、城番入る事難くして、矢文にて此城只今渡さすんハ高橋家牢舎たるへきよし申送る、城中是に驚き城を開きける、城番亀山の城代となり、高橋家は大名方へ預けとなる、元種の子孫薩州家中へ今に現然と相続あるよし三田井高橋両家の滅亡実正無之、悉くハ記し難し

元種が教利を「扶助」したために改易になったとする。史料の性格からか、「天道の悪しきをうけ」と高千穂領主であった三田井氏

を滅ぼした元種に対する憎悪が伝わる。

史料③「高千穂古跡鑑卷之下」<sup>40)</sup>

高橋右近大夫元種ハ、三田井家ヲ討亡シテヨリ武威ヲ日州ニ輝カシ、悪行日々増長シケレハ、下民等恨ヲ含ミ居ル者多カリシ、然ル近頃京都猪熊大納言殿罪有テ筑紫ニ流サレケルヲ、元種是ヲ扶助有ケル、然ルヲ三田井ノ旧臣密ニ是ヲ將軍家ニ訴ケレハ大ニ怒リ給ヒ、罪人ヲ扶助スル段言語同断ノ致方也、其罪逃レ難シ、同罪ニ処スヘシトテ、則右近大夫元種ヲ奥州へ流刑シ給フ、末世トハ言ヒナカラ神孫タル大神親武公ヲ讒言ヲ以テ亡シケル故ニヤ、三田井家ノ亡魂讐ヲナスヲ度度也、サレハ元種三田井家ヲ霊神ト仰キ奉リケレ共遺恨絶難ク、其上高橋一時ノ武威ニ誇ルト虽モ其家繁茂セス、天道ノニクシミヲ受ケ、斯成行コソアワレ也、扨城受取ニハ稲葉彦六・相良左兵衛兩大將ヲ遣サル、ト虽モ、高橋家臣等秘死ト成テ城門ヲ開カス、入事難ケレハ矢文ヲ以テ申送りケルハ、此城渡サスンハ高橋事入牢ト成ベキ也ト申ケレハ、城中是ヲ見テ驚キ城ヲ開キ相渡ス、高橋家人等ハ諸家ノ大名方へ御預トナリ、元種ノ末子ハ薩州へ落行、今ニ其子孫アリ、扨延岡高千穂残ラス有馬左衛門佐直純公ノ領分トソ成ニケル

「高千穂古今治乱記」とほぼ同様の内容で、筑紫へ流された猪熊大納言を元種が「扶助」したからだとする。また將軍家への訴人を元種により滅ぼされた三田井氏の旧臣とするなど、元種に対する怨念の深さが読み取れる。

史料④「延岡旧記」<sup>41)</sup>

(前略) 文禄元壬辰年秋、高橋右近大夫肥前国より御入部、二十四年延岡城を取立給ふ、慶長十七壬子十二月十二日、猪熊大納言殿落来給ふを隠置候ニ付奥州江流罪、嫡子主膳正者薩摩江御預、其子孫于今薩摩ニ在之、此後三年御料所に成ル、四年の後元和元卯(慶長十九年)七月十三日、有馬修理大亮五万三千石にて御入部(後略)

元種が日向国県に移封されたのは天正十六(一五八八)年であり、旧領は肥前ではなく豊前国香春岳である。また後述するように元種の嫡子は左京(藤種・一斉)であり、元種とともに陸奥に従っており、誤りが多く信を置くことはできない。

史料⑤「延陵旧記」<sup>(42)</sup>

慶長十七壬子年十二月十二日猪熊大納言落来しを隠し置たる咎によって奥州へ流さる、嫡子主膳薩摩へ預らるるに今薩州にて其子孫有、(略)

これも嫡子を「主膳薩摩へ」としている。

このほか『北川村史』<sup>(43)</sup>では次のように言う。

高橋元種の改易については、この水間勘兵衛を匿ったことが直接の動機であった。(中略) 本村には北川中学校の西方、北川本川の南岸に猪熊屋敷という地名があり、猪熊大納言が住居の跡と伝えている。(中略) またこの附近には猪熊大納言に関する種々の伝説が残っているから、猪熊大納言がここに落ち来ったということは荒唐無稽の伝説ではあるまいと考えられている。この事件は、これが直接に高橋氏改易の原因であったとは考えられない。しかし延岡城の創業をはじめ、関ヶ原戦後にお

ける高橋氏の反徳川の行動が幕府の忌諱に触れたもので、これらの事件はその口実に挙げられたにすぎなかったものと思われる。

元種の改易理由を水間勘兵衛の隠匿に求めているが、教利に関する伝説が村に残るとして、教利落人伝説が荒唐無稽ではないとする。それが直接的な改易原因ではないとするが、「反徳川の行動が幕府の忌諱に触れたもの」の具体的説明は示されていない。

以上が元種改易の原因を猪熊教利を領内に匿ったことに帰す説であるが、ほとんどが在地に残された編纂史料の類である。猪熊説はいずれも猪熊大納言(正しくは正五位下・左近衛少将)本人、もしくはその家人「水間勘兵衛」を領内に隠匿した罪によるとしている。しかし、後述するように隠匿されたのが水間勘兵衛とする説では、勘兵衛は坂崎直盛の甥(もしくは召使いの坂崎左門)となっている。猪熊教利が日向に潜伏していたとする時期(慶長十二・十四年)と、水間勘兵衛が高橋領内に隠匿されていた時期(慶長年間)が近く、高橋元種がこれらの隠匿に絡んでいたことから、猪熊事件と混淆したものと考えられる。

そもそも元種が、教利を幕命に従って捕縛し京に護送したのであれば、称賛こそされ罪人隠匿で改易されるはずはない。猪熊教利がどのような経緯で日向に潜伏して捕縛されたかはまったく不明であるが、他の史料から鑑みると猪熊事件とは無関係だと思われる。

## (二) 水間勘兵衛事件との関連

元種改易が猪熊教利事件とは無関係だとすれば、元種は富田・坂



崎出入り一件とはどのような関わりがあるのだろうか。元種の改易原因について、元種が水間勘兵衛を、A領内に匿ったとする説、B勘兵衛は元種領内には来ていないとする説、Cその他がある。以下、各史料を確認してみよう。

### A 水間勘兵衛隠匿説

元種が水間勘兵衛隠匿に連座したという内容を詳述するのは「縣改易覚書」である。

「縣改易覚書」の作者については不明であるが、元種次男長吉家に伝存した史料であることから、長吉一族かその近しい関係者であった可能性が高い。そのため内容にも信憑性が高いと考えられる。

史料「縣改易覚書」<sup>(44)</sup>

坂崎出羽守殿家中衆

一縣改易之起り、江戸御馬廻り衆水間勘兵衛と申人、科人ニ而候ニ付欠落、伊与之國宇和嶋之富田信濃殿、坂崎殿親類ニても候哉、彼方を頼走来候得共、領分ニ召置事不罷成、加藤肥後殿ヲ頼預ケ被下シ也

一縣領内肥後堺ニ高知尾と申在所御座候、いかにも山家ニて候、御国ニてハ須木・米良など之様成所ニて候、彼所ニ就中人遠キ村御座候を肥後方断被申、彼科人を為召置由候

一其後右之儀天下ニ相知レ、尤勘兵衛ハ被召届、富田信濃殿・加藤肥後殿・高橋右近殿江戸へ被召、糺明御座候而富田殿・高橋殿ハ改易ニ被仰付置候（後略）

水間勘兵衛については、「坂崎家中衆」で「科人」としている。ここでは加藤に頼まれ高橋領の高千穂に「彼科人を為召置由」としており、元種が罪人勘兵衛を領内に隠匿したと明言している。

### B 勘兵衛は元種領内には来ていないとする説

元種の同母兄である高鍋藩秋月種長家に残された「隈江家記三」では次のように言う。

史料「隈江家記三」<sup>(45)</sup>

加藤殿委細心得候トテ、肥後国ニ御引取被成、右近殿御領内境目ニ被召置、肥後殿ヨリ右近殿ニ被仰候ハ、空野七郎兵衛ト申牢人者御領内近クニ召置間、自然御領内ニ参事モ可有之候、獵場等御免可被下有之ニ付、右近殿モ被仰下段々承届候、此方ヘモ節々参ラレ候様可被成由御返答候ニ付、縣領内ニモ節々参由、清正が七郎兵衛（勘兵衛）を「御領内近クニ召置」とあり、隠し置いたのはあくまで肥後領であり、元種領内ではないとする。また、肥後を出た七郎兵衛（左門）は高橋領内ではなく大坂へ上っている。

御子息肥後守殿左ニ思召、肥後ヲ御払被成候、然トモ此間ノ頼合トテ、米三十石・銀三百枚被下、船一艘被仕立、何国ニ成トモ心ニ任セラレ候ヘトテ、肥後ヲ御払被成候ニ、大坂ニ着キ此所ニ居住ス、<sup>(46)</sup>

江戸へ呼ばれた元種が「七郎兵衛儀ニ付、右近殿少モ御存知無之」<sup>(47)</sup>「右近事今度ノ儀ハ無子細候ヘトモ」と、勘兵衛の隠匿を知らなかったとしているが、これ以上は確認できない。

## Cその他

勘兵衛隠匿以外の改易理由については、元種の「不行跡」として  
いるものが多い。

史料①梅山無一軒『南藤曼綿録』巻之十<sup>49</sup>

一慶長十八年癸丑十月日州県城主〈今ノ延岡城主〉高橋右近将監  
元積<sup>マツ</sup>御行跡行ハレザル儀ニヨツテ御仕置猥ノ由上聞ニ達シ常陸  
国赤水ニ御改易、依テ右県ノ城御請取トシテ豊後国臼杵城主稲  
葉彦六郎正通、相良宮内少輔頼房御両所上意ヲ蒙リ、県へ御越  
成サレ候、

史料②『歴代嗣誠独集覽』<sup>50</sup>

一、慶長十八癸丑年十月、日州県ノ城主高橋左近将監元種、国政  
猥ナル由達上聞被没収領地被預奥州棚倉領主立花左近将監宗茂  
一説ニ常陸国赤水ニ改易ト云々、

ここでは元種が罪人を隠匿したことは記されていない。

また「隈江家記三」には次のような興味深い説を載せている。

史料③「隈江家記三」<sup>51</sup>

尾州ノヲカメ様御ネンコロニ被成事ケツク害ニ成候、其時秀  
家公ノ御出頭本多上野介殿サ、へ被申候ハ、右近事今度之義<sup>(正純)</sup>  
ハ無子細候ヘトモ、奥方ニ取入ル事無心元候、ケ様成者御立置  
候ハ、御仕置ノ妨ニ成候間、御ツフシ可被成之旨、達テ秀家公  
ニ被申上候ニ付、奥州棚倉ニ流罪、立花飛騨守殿御預、飛騨守<sup>(宗茂)</sup>  
殿本国ニ被召返ニ付、丹羽左京殿預リ二本松ニ配所ヲカヘラレ  
候

元種の改易理由が、「尾州ノヲカメ様御ネンコロニ被成事ケツク害  
ニ成候」と、元種が「尾州ノヲカメ様」すなわち家康側室の御龜（相  
応院）に周旋を依頼したからだとする。秀忠側近の本多正純が、「奥  
方ニ取入ル事無心元候、ケ様成者御立置候ハ、御仕置ノ妨ニ成候間、  
御ツフシ可被成之」と諫言したからだという。「ヲカメ様」を元種  
の叔母とするが、具体的にどのような関係にあったのか、また御龜  
様に周旋を依頼することが可能か不明である。

このように、元種改易は一連の富田信高の水間勘兵衛隠匿に連座  
したという説が多いが、勘兵衛は高橋領内には来ていないとする説  
や、そもそも元種は勘兵衛隠匿を知らなかったとする説なども一部  
存在する。

これについて、時代は下るが万治二年と考えられる史料がある。  
これは高橋家家老の一人であった吉用美作の子隼之允が残した、父  
美作から聞いたという改易にまつわる内容である。<sup>52</sup>

## 〈包紙〉

高橋右近御改易之年、御科之様子可申上之旨、次ニ私亡父吉用  
美作御預ケ者ニ罷成候段可申上候由、有増及承候分書付

一高橋右近儀、四十五年前寅ノ年御改易被仰付候、坂崎出羽守殿  
ニ水間勘兵衛と申牢人、出羽守殿を背罷出、富田信濃守殿を頼  
かくれ居申処ニ、信濃守殿が古加藤肥後守殿御頼御預ケ、古肥  
後守殿が国ならひ故、高橋右近家来之ものニ御預ケ隠置申処ニ、  
出羽守其段御訴訟ニ付而、富田信濃守殿・高橋右近兩人浪人ニ  
被仰付候、古加藤肥後守ハ其刻御果被成、若代故御子息肥後守

殿へハ公儀方御構も無御座候

一右近家来吉用美作と申者儀、件之牢人勘兵衛美作隠シ置申ニ付而、駿府へ罷越本多上野殿・安藤常刀殿・成瀬小吉殿迄目安を以、右近少も不存、美作下ニ而隠シ置申段申上候ニ付而、其刻本多上野殿へ御預ケ、其後立花飛驒守殿棚倉ニ御座候刻、御老中三位、美作義ハ御免被成、それ方上方へ罷上り申候由右之段私亡父并兄申聞せ候得共、日向ニ罷在候刻ハ私幼少故委存不申候

これによると、水間勘兵衛が出羽守所を立ち退き、富田を頼り隠れていたところ、富田より加藤に預けられた。加藤領と「国ならひ故」すなわち隣国であるので、高橋右近家来に預けたというのである。これにより富田・高橋は改易となったとする。清正から依頼されて勘兵衛を隠し置いたのは家老の吉用美作であり、元種は「少も不存」と断言している。幕閣に目安を出して訴えたが本多正純に預けられ、許された後は上方に上ったという。このことは亡父や兄から聞いたとしている。

これが元種の実際の証言とするならば、元種は自分の関知しないものの、「罪人隠匿」という罪科で改易されたことが真相だということになる。

### 三 改易後の動向

#### （一）縣城請取りの経緯

大名改易にともなう城地の請取りは、軍事出動として進められる。改易が発令されると、幕府はその居城と領地接收のための要員を選

定し現地に派遣する。<sup>(53)</sup>

縣城の請取りは、豊後臼杵城主稲葉彦六と肥後人吉城主相良頼房に命じられた。頼房は十一月十日、相良清兵衛・同内蔵助と雑兵二〇〇余人を率いて人吉を発駕し、十四日に日向県に到着した。『歴代嗣誠独集覽』では次のように記す。

（前略）依之県城為請取、豊州臼杵之城主稲葉彦六郎正通并頼房公御両所被蒙台命県へ御越、但十一月十日乙丑当郡御発駕、始相良清兵衛尉・同内蔵助、雑兵三百余人之御供ニテ御両所共ニ同十四日ニ県へ御着<sup>(54)</sup>

また『南藤曼綿録』には次のようにある。

（前略）仍テ右県ノ城御請取トシテ豊後国臼杵城主稲葉彦六郎正通並ニ相良宮内少輔頼房公以上兩人仰ヲ蒙リ県ニ御越シ成サレ候、但十一月乙丑頼房公御当地御発駕、尤モ清兵衛尉並ニ内蔵助已上父子御供、其外雑兵三百余人、凡御当地御発駕ノ日ハ薩州内野尻へ御着、翌十一日戸ノ川里へ御着、十二日日州美美へ御着、秋月殿領、翌十三日後見へ御着成サレ候、偕稲葉殿ハ其日清太へ御着ニテ同十四日御両所同日県へ御着成サレ候<sup>(55)</sup>

筈谷和比古氏によれば、大名改易の執行過程が軍事的行為として遂行されるのであれば、これを迎え受ける改易大名側の対応にも、きわめて重要な軍事的契機が含まれているという。すなわち家臣たちは居城の留主を預かる以上、主君の直命なくして城の引渡しはありえず、主君手書の開城指示の書付が条件であった。<sup>(56)</sup>

縣城請取りも例に漏れず、城引渡しは必ずしも順調に行われたわけではない。その経緯を『縣改易覚書』からみてみよう。

十一月五日、豊後境の庄屋が来て言うには、縣改易につき城請取りに臼杵城主稲葉彦六が縣に来るといふ風聞があるという。驚いた留主居家老華田備後は主だった家中の者を集めて談合するなど、家中が騒然となった。この時点では、高橋家中にはまだ元種の改易が伝えられていなかったようである。

三日後に稲葉彦六は稲葉九兵衛を遣わして、留主居の者に対して元種が改易になったこと、縣城を請取るので抵抗することなく城を明け渡すよう伝えた。その夜、家中士たちが家老華田宅へ呼び集められ、稲葉使者の趣旨が伝えられた。これに対して家老華田は、

併江戸一左右不承、渡シ申事迷惑ニ候、最早左右も程有間敷候条、其間御待可被下候、其上ニても押テ御取候ハ、籠城可仕覚悟ニ候、右ノ段各於御同意有其通可申候、何ぞ御相談承儀候ハ、可被仰候由被申渡候<sup>57)</sup>

すなわち、状況が分からないので詳細が分かるまで（元種の手書が届くまで）城請取りは待つて欲しいこと、それでも強行するのであれば籠城も厭わない覚悟である旨を家中士たちに図った。彼らが皆同意したので、翌日九兵衛方に伝えたが、その（改易の）意趣は分からないという。

そうこうしているうちに五日ほどたち、江戸から吉村勘右衛門が縣に下り、元種の改易が決定したこと、立花宗茂に預けとなり奥州に行くこと、抵抗することなく城を引き渡すべき旨が伝えられ、縣城は無事引き渡された。<sup>58)</sup>

今回の縣城請取りの一連の経緯について、『南藤蔓綿録』には次のように記されている。

但其前簾県惣家中一味ニテ持コタヘ一戦仕ルヘキ由申候へ共、花田備後ト申ス老功ノ家老壹人ノ分別ニテ異議ナク城ヲ御両所へ相渡シ申サレ候、因茲同十五日首尾克ク城ヲ御請取成サレ候、但シ本丸ハ稲葉殿、二ノ丸ハ頼房公、三ノ丸ハ御両所ノ御家中馬場分ケ召置カレ候テ、万事御仕置等念頃ニ仰付ラレ候、且亦所ノ城番御両所自御家中面々ニ仰付ラレ候、但シ宮崎城ニハ米良三郎左衛門、新宮市左衛門、宮原十兵衛、犬童源四郎、稲葉殿ヨリモ御人数召置レ候、本丸ニハ犬童新助、三宅ニハ犬童角兵衛、保喜多ニハ菱刈清助、塩見ニハ深水主膳、田代宇那麻ニハ菱刈平駄、松山ニハ東仁兵衛、尤モ稲葉殿ヨリモ一兩人宛差置カレ、惣シテ金銀ハ申スニ及ハズ兵糧等迄替銀イタシ京都へ上納成サレ候、但シ右宰領トシテ此方ヨリハ犬童七兵衛、有瀬小兵衛、其外歩行以外差置カレ候、惣シテ中二日御休息成サレ、十二月下旬御両所県御発足遊バサレ候<sup>59)</sup>

十一月十五日、城引渡しが無事に終了したことを、家老花田備後の「分別」とする。城番は本丸を稲葉氏、二之丸を相良氏、三之丸を両所家中として万事仕置きを念入りにするよう命じている。また縣城だけではなく、高橋領である宮崎城・三宅・保喜多（穂北）・塩見・田代宇那麻（宇納間）・松山などにも両家家中士を置き、金銀はもとより兵糧等まで換銀して京都へ上納した。残務処理を済ませた稲葉・相良両所は十二月、縣を発って帰国した。

高橋領と境を接する薩摩藩島津家久に対し、稲葉彦六は次のような書状を送っている。

従是以書状可申入覚悟候処、預貴札本望ニ存候、高橋右近背御

法度被成御改易跡識為御改、相良方兩人至縣參着候、則致入城、只今家財知行分相改申半ニ候、就其御領分入組之由候間、自然高橋領之百姓懷年貢、其方御領中ニ立隠候儀も御座候者、自是可申入候条、急度被仰付可給候、御同右馬充殿へハ此方近辺之儀候条、右之趣今朝相良方兩人より以書状申入候、爰元逗留中猶追而可得御意候、如仰其以来以書状も不申入、無音所存之外候、恐惶謹言

「朱力キ」

「慶長十八年」十一月十六日

稲葉彦六

羽柴陸奥守様

御報<sup>⑧</sup>

典通（花押）

元種改易につき「跡識為御改」すなわち残務整理として、稲葉・相良両氏が縣に参着・入城し、家財・知行分改めをしているが、高橋領が島津領分と入り組んでいるため、もし高橋領の百姓が年貢を着服し島津領に立隠れることがあれば知らせてほしい。佐土原城主の島津以久領も近辺であるので、このことを両氏から書状で申し入れるという。また「百姓已下他口へ罷のくものとも候ハ、可相改之由候」<sup>⑨</sup>と、百姓たちが他国へ立ち退くことを警戒している。このように改易後の高橋領では、藩士はもとより領民の間にも動揺が広がっていたことがわかる。

立花宗茂や藤堂高虎らの奔走もあり、改易された元種の家財について、本多正信らから稲葉・相良宛に次のような指示がなされた。

十一月廿一日之御状、極月十五日令拜見候、仍高橋<sup>（元種）</sup>右近居城、去十五日ニ御請取、家財改被為置之由、得其意存候、

一最前者可在其ニ御改可在之由申入候へ共、重而之書状ニ、家財之儀者右近へ被下候間、知行分之先納御請取可被成旨申入候、其分御心得可有事、

一右近舟之儀蒙仰候、御上米払方ニ入可申舟之分者御留候て、其外事ハ、右荷物以下住所へ可被相届候間、御見計候て、右近方へ被遣尤候事、

一女共之儀者、右近指図次第被成、重而御注進可有候、恐々謹言、

安藤対馬守

重信（花押）

土井大炊助

（慶長十八年）  
極月十五日

利勝（花押）

酒井雅楽頭

忠世（花押）

本多佐渡守

正信（花押）

稲葉彦六殿  
相良左兵衛殿  
御報<sup>⑧</sup>

これによると、城受取りは十一月十五日に済み、家財は元種に与え、知行分の先納は請け取ること、上米払方の船は留置き、そのほか荷物以下は元種に遣わすこと、女たちは元種の指図次第にすることなどを指示している。また同日付で、「知行分物成御納、家財之儀者、其旨如申入候、右近留守居ニ御渡候由、尤存候」<sup>⑩</sup>と、知行物成や家財は元種の留守居に渡すよう便宜が図られていることがわか



る。

『隈江家記 三』によれば、元種改易を知った藤堂が急遽家康を尋ねたことが記されている。

(高虎)

右近殿身躰危キ由、藤堂和泉守殿御国ニテ被聞召付、急キ江戸ニ御越候処ニ、和泉守殿御着一日前ニ御改易ト被仰出候、和泉殿ハ江戸ニ御着候ヘトモ、御屋敷ニモ入不給、家康公河越ニ御成ノ所ニ直ニ御出候ヘハ、家康公御覽シ、和泉ハ只今何ノ為メニ参府候哉ト上意ニ候、其義ニ御座候、高橋右近事御穿鑿有之旨承及候間、無如在通申分仕候ハント存、罷下候ヘハ、昨日召ツブサレ候由不及是非ト有ル、家康公被聞召、其事ニ候、今度ノ儀ハ高橋無越度候ヘトモ、秀家ト上野介ト相談ニテ申付ル上ハ、隠居ノ身トシテカマイ候事モ如何ト思ヒ、其分ニ候ト上意也、又和泉殿被仰上候ハ、家財等ノ儀ハ無相違被仰付候ハ、難有可奉存由ニ候、家康公御自筆ノ御書被成下、家財不残右近殿ニ被下候事<sup>(64)</sup>

元種の「身代危き由」を国元で聞いた高虎は、急ぎ江戸へ下ったが江戸に着く前に改易が決まったという。高虎は屋敷にも入らず川越にいた家康のもとに駆けつけた。何のための参府かと問われた高虎は、元種が穿鑿があったと聞き弁明するために江戸へ下ったことを言上した。ここで注意したいのは、家康が「今度ノ儀ハ高橋無越度候ヘトモ」と、元種が無実であること認めている点である。高橋家の親類である秋月家側の史料であるので、身量な内容であることは否めないが、少なくとも秋月家では元種が無実であったと考えていたようである。

家康は元種の改易は将軍秀忠と上野介（本多正純）が相談して決めたことで、自分は隠居の身なので立ち入るのはどうかと思うという。高虎が、元種に家財などを間違ひなく下されればありがたいと願うと、家康は自筆の御書を与えたので、家財は残らず元種に下されたとしている。家財が元種に下された点は本多正信らの書状内容と符合する。

## (二) 元種子息のその後

元種には男子三人あり、嫡子左京は元種とともに棚倉、次男長吉は薩摩、三男権之助は人吉へとそれぞれ仕官することになる。

### ① 左京（藤種・一斉）

嫡子左京は、父元種とともに奥州棚倉の立花宗茂に預けられるが、宗茂が本国の筑後国柳川に所替えになると、代わって元和八年に入封した丹羽長重の預かりとなる。元種と長子左京のその後について、『世臣伝 八之上』<sup>(65)</sup>は次のようにいう。

同十九年元種ハ配処にて空敷なりぬ其子左亮某元和八年傑俊公棚倉の城賜らせ給ふ時其儘にてそ候ける寛永四年白川の城に移らせ給ひても棚倉の城ハ御領内にて有しかハ元の如く預らせ給ひしに左京亮ハ姓名改入道して田原一斎と号し御家人の数にあらね共慈明公の御時承応二年六月俸米黄金等を下し賜る<sup>五十口金五枚</sup>貞享元年五月二十三日空敷なりぬ

元種は翌年棚倉で死去し、左京は元和八年に棚倉に入封した丹羽長重に預けられた。寛永四年、長重は白河に移封になるが、棚倉城が白河領内ということそのまま預けられ、左京は姓名改入道して

田原一斎と号した。長重のあと光重代の承応二年六月に俵米・黄金等を下賜され、貞享元年五月に死去した。その子将監重次は、天和元年十二月に録高四〇〇石で丹羽家に召し抱えられている。

なお妹おかねは、宗茂に引き取られ、本多下総弟の旗本本多内蔵介に嫁ぎ、二人の子をなすが後に離縁し、宗茂の養女として家臣矢嶋左馬介へ嫁したという<sup>66</sup>。

## ②長吉（種直・主膳）

次子長吉は島津家に一〇〇〇石で召し抱えられるが、その経緯を「縣改易覚書」からみてみよう。

長吉には以前より辻休右衛門が付けられており、縣城立ち退き後筑心庵という寺に休右衛門ともども中宿した。ここで越年し、翌年正月に秋月領瓜生で中宿したが、その際に縣牢人の立ち退きには奉行より津口番船を出して、手形の人数外は厳しく改められていた。長吉が乗る船も改めると津口番衆が言うので、休右衛門は「右近子共乗申たる舟ニ而候、家中ノ者同前ニ舟中改させ申事不罷成候」、押して改めるのであれば自分たちはここで切腹し、「子共何も海ニしつめ可申候」と言った。番衆が奉行に問い合わせ、無事に津口を通ったという。

瓜生には寅（慶長十九）年十月まで居たが、逗留中秋月家家老が「早々御直シ可被成候由」を折々使者を差し立てるので、休右衛門は「さきヲ定さる内ハのキ申間敷」と居座った。この時瓜生村に供として居たは辻のほか、萱島喜左衛門・岐部一左衛門・中村忠右衛門らで、「親子同前」の間柄であった。

瓜生村に逗留しているうちに、鹿児島島津家に召し抱えられることになり、日州綾村へ住居するよう命じられ、百姓屋敷と五・六町程の畠を与えられた。座所は公儀（藩）が作って渡され、供たちは思い思いに百姓家や宿を借りた。綾村に五・六年程居て、鹿児島に屋敷ができたのでそこに移った。その時長吉は知行一〇〇〇石を拝領し、元家老の華田備後・吐師七左衛門も二〇〇石で召し抱えられた。

長吉は休左衛門も備後・七左衛門並に直ぐに召し抱えて欲しいと訴えたかったが、二人を召し抱えてもらった上に、重ねて願い出ることはできなかった。休左衛門は長吉を後見しながら程なく亡くなった。このように休左衛門は誠意ある者だったので、血筋の者に跡目を継がせ、辻新右衛門という者を自分に付け置いてくれた。養父長吉が言うには、時機をみて新右衛門の赦免を願ひ、私附衆中をお許しくださるようお願いするようにということであった<sup>68</sup>。

長吉の家系は、初め姓を田原と称すがのち本姓高橋に戻し、種直（長吉）―種周―種房―種壽―種央と続き、種壽と種央は薩摩藩の家老職を務めている<sup>69</sup>。

## ③權之助（大助）

權之助については、「御子一人相良家へ御越シ一人ハ高橋ヲ名乗リ一人ハ菊池ヲ名乗被成候」とあるように、人吉藩相良氏に召し抱えられた。その経緯は次の通りである<sup>70</sup>。

御二男右近将監其御妹御当地頼房公御簾室、但元積泉在城ノ節、本腹妾腹共ニ御子九人有、内脇腹ノ御男子高橋權之助殿宅人御

当地居住、此由緒ハ、其前御叔母御当地御入興遊ハサレ候老岐守頼寛公御母公ナレバ、此由来ヲ以テ生年廿八歳ニテ寛永十三丙子年三月十五日薩摩ヨリ御当地ニ来リ、夫ヨリ頼寛公御供ニテ江戸へ参リ、但シ県没落ノ節ハ権之助僅カ五歳也、其後江戸ヨリ御当地下向ノ処ニ寺ノ馬場土方九郎左衛門跡ニ後家人仰付ラレ新知三百石拝領イタシ、其後田代半兵衛尉居宅相残り候ヲ仰付ラレ、今ノ大台所前角屋敷也、其前菊池弥兵衛尉武宗苗字養子ニテ高橋ヲ菊池ニ改メ、又権之助玄蕃ト改メ、其後菊池宗固ト申候也

元種の妹が相良頼房に嫁し、当主頼寛の母堂であつた縁で、縣改易の時権之助は僅か五歳だつたという。寛永十三年三月十五日、二十八歳の時薩摩より人吉に來た。頼寛の供をして江戸へ行き、当地下向に際して寺ノ馬場土方九郎左衛門跡を継ぎ新知三〇〇石を拝領した。その後田代半兵衛尉居宅を与えられ、菊池弥兵衛尉武宗の苗字養子となり高橋姓を菊池姓に、また権之助玄蕃と改めて菊池宗固となつたという。その子の一人は菊池源左衛門、もう一人は高橋伊織と、菊池・高橋それぞれの姓を名乗っている<sup>②</sup>。

## むすびにかえて

以上、富田・高橋改易について諸説を整理し、その記事を載せる諸史料を確認するとともに、どの記事内容が妥当であるかを検討し、近世初期の大名改易と御家相続について考察してきた。今までに明らかになつたことをまとめてむすびにかえたい。

まず富田信高改易事件については、信高の子富田宗清による覚書

である『富田宗清覚書』が最も詳細で真実に近いと思われる。覚書は坂崎直盛の甥左門（水間勘兵衛）が立ち退き富田信高を頼つたところから始まる。左門が立ち退いた理由については諸説あり、どれも確定しがたい。左門の引渡をめぐって富田・坂崎両家の出入りとなり、直盛が家康に訴えたことから事は公となつた。信高の室が左門を扶助したことを示す陰書が直盛の手に渡り、それが御前公事での証拠となり、信高は改易となつたというのが真相のようである。信高の罪状は、慶長十八年四月十二日に発布された「三ヶ条誓詞」のうち第二・三条目への抵触、すなわち「背国法者」である罪人左門を匿つたことに他ならない。

一方高橋元種の改易については、在地に残る数多くの史料が猪熊事件との関わりを示唆するが、元種に猪熊を匿う理由はなく無関係であることは明らかである。

元種の改易に関する史料は、「縣改易覚書」や「高橋右近殿一卷吉用隼之允覚書」などの高橋家旧臣の手によるものや、元種の実兄秋月種長家で編纂された『隈江家記三』などが、内容的に妥当だと考えられる。元種は、加藤清正から左門の隠匿を頼まれ、領内に隠したとする罪人隠匿の罪で、信高に連座して改易となつたというのが真相に近いと思われる。これは富田信高と同様に、罪人を隠し置くことを禁じた慶長十六年「三ヶ条誓詞」に抵触したからである。この三ヶ条誓詞が諸大名が徳川家への忠誠を誓約したものであれば、それへの抵触はその誓約を破ることに他ならない<sup>③</sup>。

直盛との対決の場で、信高は勘兵衛の所在はもとより、室が勘兵衛を扶助したことも知らないと主張した。また元種の場合も、罪人

隠匿は家老吉用美作の一存の所業であり、元種自身は関知しなかったようである。状況からみて、両氏が隠匿を知らなかった可能性は大きいと言える。しかし、その言い分は通らなかった。罪人隠匿に關しては、それを当人自身が関知していたかどうかでは無く、「家」全体としてのとしての判断・行為と見做されるのであり、あくまで「法」に準拠して処分されたのである。

元種改易後、一連の縣城請取りをみると、武士道上の作法として嚴格に遵守されていたことが分かる。<sup>(14)</sup> また、元種の子息たちの身の振りをみると、嫡子左京は父元種とともに奥州棚倉の立花宗茂のもとに預りとなり、宗茂が柳川に本領復帰した後、二本松の新領主丹羽家に仕える。このほか長吉は薩摩島津家に知行一〇〇〇石で召し抱えられ、種壽・種央は家老職を務めている。権之助は人吉相良家に召し抱えられ、高橋家を伝えていく。一方富田家も、信高の嫡子知幸は慶長年中に水戸徳川家に仕え、次男知儀は綱吉に仕え、その子知郷は知行七〇〇〇石の上級旗本となり、富田家を相続していくことになる。<sup>(15)</sup>

## 註

- (1) 藤野保『新訂幕藩体制史の研究』（吉川弘文館 一九八三年）二五九頁。
- (2) 三上参次『江戸時代史』（富山房 一九四三年、復刊・講談社学術文庫 一九七六年）、栗田元次『江戸時代史・上巻』（内外書籍『綜

- 合『日本史大系』一七卷 一九二七年、復刊・近藤出版社 一九七六年。
- (3) 木村礎「延岡藩領とその支配」『譜代藩の研究』八木書店 一九七二年。
- (4) 筈谷和比古「大名改易論」『近世武家社会の政治構造』吉川弘文館 一九九三年）三二一～三二二頁。
- (5) 佐藤宏之『近世大名の権力編成と家意識』（吉川弘文館 二〇一〇年）。
- (6) 藤野前掲（1）二六〇～二六一頁。
- (7) 東京帝国大学文学部史料編纂掛編纂『大日本史料』第十二編之十三（東京帝国大学文学部史料編纂掛 一九〇九年）七八頁。
- (8) 『右同』八一～八二頁。
- (9) 『右同』一〇九頁。
- (10) 秋月家文書『宮崎県史 史料編 近世1』一八一頁。
- (11) 前掲（7）一一一頁、『朝野旧聞衰藁』（国立国会図書館蔵）
- (12) 慶長十年五月『史籍雜纂』第二 国書刊行会 一九一二年）八十九頁。
- (13) 前掲（7）八二～八三頁。
- (14) 『新訂 寛政重修諸家譜』第19（統群書類従完成会 一九九二年）三七〇頁。
- (15) 前掲（7）八三～八四頁。
- (16) 前掲（14）三七〇頁。
- (17) (18) 前掲（7）七九頁。
- (19) 『右同』八五頁。
- (20) 『右同』一一〇頁。

- (21) 児玉幸多編『注釈日本史料 御当家紀年録』巻四(集英社 一九九八年) 三五四頁。
- (22) 前掲(10) 一八一〜一八二頁。
- (23) 前掲(7) 八四〜八五頁。
- (24) 松尾恵美子氏は、運河開削で領民が疲弊するなど治世にも問題があったのとはとしている(「富田信高の改易と武家諸法度」(駒沢大学大学院日本史学学政研究室編『駒沢大学史学論集』四三巻 二〇一三年) 五頁)。
- (25) 前掲(14) 三七〇頁。
- (26) 前掲(7) 八五〜八六頁。
- (27) 前掲(21) 三五四頁。
- (28) 『右同』三五二頁。
- (29) 前田育英会尊経閣文庫蔵(中村孝也『徳川家康文書の研究 下巻之一』日本学術振興会刊 一九六〇年) 六六二頁。
- (30) 松尾前掲(24) 八頁。藤井讓治「1」法度の支配(藤井讓治編『日本近世 第3巻 支配のしくみ』(中央公論社 一九九一年) 一八〜一九頁)。
- (31) 木村礎「延岡藩領とその支配」『譜代藩の研究』(八木書店 一九七二年) 三九三〜三九四頁。
- (32) 喜田貞吉『日向國史』下巻(史誌出版社 一九三〇年) 三六頁。
- (33) 野口逸三郎「高橋元種文書について」(宮崎県総合博物館所蔵『高橋文書』宮崎県総合博物館発行 一九七二年)。
- (34) 『徳川実紀第一巻 台徳院殿御実紀巻十 慶長十四年七月』四八九〜四九〇頁。
- (35) 「佐竹文書」二乾(『大日本史料』十二編之六) 七二四頁。
- (36) 松田仙峽『高橋元種』(一九六三年) 一二八〜三〇頁。
- (37) 『右同』一二九〜三一頁。これについて松田氏は「北川伝説には信をおき難い」と述べている。
- (38) 内藤家文書 第一部三 藩史資料 一二九。
- (39) 内藤家文書 第一部三 藩史資料 一三二。
- (40) 内藤家文書 第一部三 藩史資料 一三三。
- (41) 内藤家文書 第一部三 藩史資料 三八二。
- (42) 『日向郷土史料集』第一巻(日向郷土史料集刊行会 一九六一年) 三四五頁。
- (43) 北川村役場 一九六四年 一五七〜五九頁。
- (44) 高橋家伝来武家書状集『宮崎県史 史料編近世1』六九頁。
- (45) 秋月家文書『宮崎県史 史料編近世1』一八一頁。
- (46) 『右同』一八一〜一八二頁。
- (47) (48) 『右同』一八二頁。
- (49) 梅山無一軒『南藤蔓綿録』巻之十(肥後国史料叢書 第三巻 青潮社 一九七七年) 二二三頁。
- (50) 『歴代祠誡独集覧 相良村誌資料編二』巻之十五(相良村誌編纂委員会 一九九五年) 二三二頁。
- (51) 前掲(10) 一八二頁。
- (52) 「高橋右近殿一巻吉用隼之允覚書 二」(柳川古文書館蔵 立花文書八〇〇)。
- (53) 筈谷和比古『近世武家社会の政治構造』(吉川弘文館 一九九三年) 三二六〜三二七頁。



- (54) 前掲(50) 二二三頁。
  - (55) 前掲(49) 二二四頁。
  - (56) 前掲(53) 三二七、三二八頁。
  - (57) 『縣改易覺書』（高橋家伝来武家書状集『宮崎県史 史料編 近世1』宮崎県 一九九二年）七〇頁。
  - (58) 笠谷氏によれば、藩主よりの手書が到来するまでは、籠城態勢をとって幕府軍による城地の接收を阻止すべきであるとするのが、幕藩領主を含む武家社会全体の共通見解となっていきつつあったとする（笠谷前掲(53) 三三〇頁。
  - (59) 前掲(49) 二二四頁。
  - (60) (61) 『鹿児島県史料 旧記雑録後編四』一〇六七（鹿児島県 一九八四年）四二七頁。
  - (62) 「相良家文書之二」九一四 本多正信外三名連署奉書（『大日本古文書 家わけ第五』東大出版会 一九七九年）三七〇、三七二頁。
  - (63) 「右同」九一五 本多正信外二名連署奉書（『大日本古文書 家わけ第五』東大出版会 一九七九年）三七二頁。
  - (64) 前掲(10) 一八二頁。
  - (65) 「世臣伝 八之上」「安井健夫家文書」「二本松市史 資料編3 近世Ⅱ」「二本松市 一九九九年初版復刻」八七一頁。
  - (66) 高橋家覚書（高橋家伝来武家書状集『宮崎県史 史料編近世1』七四頁。
  - (67) 元和六年二月二十七日「薩隅日三州一所衆并麿府衆中高極之帳」『鹿児島県史料 旧記雑録後編4』一九八一年）七四二頁。
  - (68) 高橋種周口上（高橋文書『宮崎県史 史料編近世1』八七頁。
  - (69) 『薩陽武鑑』（尚古集成館 一九九六年）七八頁。
  - (70) 「本藩実録卷之二」『宮崎県史料 第一卷 高鍋藩本藩実録』宮崎県立図書館 一九七五年）五九頁。
  - (71) 前掲(49) 二二四、二二五頁。
  - (72) 「大蔵姓秋月氏末葉記録」（秋月家文書『宮崎県史 史料編 近世4』宮崎県 一九九五年）一五五頁。
  - (73) 松尾前掲(30) 六頁。
  - (74) 笠谷前掲(53) 三二二頁。
  - (75) 『寛政重修諸家譜』第一九（統群書類従完成会 一九九一年）三七〇、三七二頁。
- 〔付記〕 本稿の執筆にあたり、明治大学博物館および福岡県立柳川古文書館にはたいへんお世話になりました。末尾ながら記してお礼申し上げます。